

書 評

Judy Ledgerwood ed. *Cambodia Emerges from the Past: Eight Essays*. DeKalb: Southeast Asia Publications, Center for Southeast Asian Studies, Northern Illinois University, 2002, 305p.

2003年は UNTAC(国連カンボジア暫定統治機構)によって準備されたカンボジア統一選挙から10年目にあたり、夏には1998年に続く2度目の国政選挙が予定されている。この期間、比較的安定した国内外の状況のもと、内戦と国際的孤立を脱したカンボジア社会は急激な変化を遂げた。本格化した開発援助と世界市場への参入によって加速された社会経済的变化は当然として、Pol Pot の死と Ieng Sary をはじめとした高級幹部の投降、すなわち政治勢力としてのポルポト派の消滅は、この10年間のカンボジアの変化を如実に象徴する。またカンボジア研究にとっても、1960年代末より閉ざされてきた現地調査の道が開け文書資料の整理公開も大きく進んだ、大きな変化の10年であった。アメリカを中心としたヴェテラン、若手のカンボジア研究者による最新の論考を集めた本書は、以上のような変化の渦中にあるカンボジアの現在を把握し、将来の研究の方向性を探るために好適な論文集である。

第1章は、歴史家 David Chandler が、民主カンブチア政権(ポルポト政権)下の政治犯収容施設に残された大量の告白文書を取

り上げる。S-21 とコード名で呼ばれた首都プノンペンの収容所には、3年あまりの期間に約14,000人が収容され、ほぼ全員が殺害された。Chandler は、The Tuol Sleng Museum of Genocidal Crime として現在公開されている収容所で発見され、入手可能な4,300名ほどの囚人の尋問書を、誘導された歴史文書と位置づけ、そこに党中央の意識の反映をみようとす。つまり、彼によると、ポルポト政権の中核ともいえるこの機関を支配していたのは、拷問を用いて党中央が必要とする「真実」を囚人に告白させ、それを綿密に文書化することで過去を支配し歴史を書きかえようという営みであった。その結果、さまざまな急進政策が行き詰まり、窮状が深まれば深まるほど S-21 はより円滑に機能し、革命的熱意によって「発掘」された真実と引き替えに多くの人命が失われていった。

1990年代に公開された新資料を用い、指導者たちの意識を考察の対象とする意欲的な取り組みは、評価できる。しかし内容は同著者の単著と大きく重なり、記述の厚みと論旨展開の注意深さの点は及ばないと言わざるをえない [Chandler 1999]。

第2章は、人類学者 John Marston による民主カンブチア政権とモダニティの思想との関係についての論考である。Pol Pot から民主カンブチア政権の指導者の多くが、青年期にフランスへ留学していたことは広く知られる。そこで、後に遂行した革命の諸政策を留学経験と関連づけ、近代化または急進的なマルクス=レーニン主義革命を目標とした「失敗したモダニティ」として民主カンブチアを理解

する視点が提出されてきた。しかし Marston はそれを退け、人々が独自の時空間において伝統と認識するものと対照して思い描くある認識の枠組み、つまり過去と未来とを結びつけるセンスからモダニティの問題へのアプローチを試みたいと主張する。

残念ながら本論は、論旨をつなぐ基本部分に説得的な議論が伴うとは言いがたい。たとえば Marston は、民主カンブチア政権の政策イデオロギーと実践の両面に通底した美的感覚にも似た原初的衝動として、民族的ナショナリズム、理想的には唯一の個人的ネットワークで覆われた社会像、そして党と国家がひとつの身体として想念されるメタファーの3つを挙げるが、その原初的な性質の生成過程についての言及はない。しかし本稿は予備的な考察との断りが本文中にあり、今後の研究の進展に期待したい。

第3章は、アメリカ認知人類学が概念化した「文化モデル」という視点から民主カンブチア政権下の大量殺人を取り上げ、研究を發表している Alexander Hinton の論考である [Hinton 2002]。Hinton によると、民主カンブチアの革命は、腐敗した旧社会に対して純粋な新社会を建設しようという企てであり、その暴力の多くは、政権が不純とみなした対象を破壊する純粋化 (purification) の過程として理解できる。そして純粋性とは調和、秩序と等価であり、秩序とカオスの交代という上座仏教に特徴的な哲学への連想から、民主カンブチアのイデオロギーや行動は、古来の王権と同様に、カオスに満ちた社会に再び秩序を取り戻そうとする論理として理解できると述

べる。

ジェノサイドといった問題は、単一のロジックではなく複合的な視点から検討されるべきであると評者は考える。Hinton が純粹／不純という二項対立で整理する事象は、実際はさまざまなレベルに分かれる。また、コンピュータ・サイエンスのテンプレートといった用語で人間の社会的行為を考察する視点の限界は、実践を無視した一面的な上座仏教論にもみてとれる。

第4章は、内戦前にカンボジア農村でフィールドワークを行った唯一の人類学者 May Ebiara が、1990年代に調査村を再訪し、彼女が村を離れて以降の村人の経験についての語りから、民主カンブチア政権の権力への記憶を分析する。家屋、仏教寺院、水田、殺人が行われた森、残された地雷など具体的な景観の変化、子宮が墮ちるという女性の身体に関する語りなどにふれる一方、その悪夢を覆うようにして近年立ち現れてきた現在の社会状況を考察し、全く新しい革命的社会の建設という Pol Pot の企ては、結局は成功しなかったのだという含意を導く。

内戦以前からカンボジアに関わったヴェテラン研究者の記述からは、カンボジア社会の現状と未来に対してある種のナイーブな祈りにも似た感情を評者は時に感じる。しかし本章の Ebiara は感情論だけに終わらず、現在のカンボジア村落社会は革命以前の単純な復元ではなく、伝統は再創造され変化する状況に従って変容して現れるとの明確な分析視点に立つ点で評価できる。

第5章は、1990年代にカンボジアでの調

査を開始した研究者 2 名が、1979 年以降の農村におけるリーダーシップの変化について論じる。Judy Ledgerwood は、1980 年代にアメリカのクメール人を対象としてジェンダー研究を行った後、1990 年のユニセフのプログラムを皮切りにカンボジア本土での調査活動を開始した。他方の John Vijghen は 1990 年にまずボランティアとしてカンボジアに渡り、以後は主に開発プログラムの実施やカンボジア人調査者の育成などに関わってきた。著者らによると、1980 年代は社会主義政権による村落レベルまで直結した権力構造が明確であったが、1990 年代には開発プロジェクトなど外部社会との新しいチャンネルが重要性を増し、農村社会での意志決定プロセスには以前より多様な要素が作用するようになった。

「民主カンブチア政権によって社会制度は破壊され、後には原子化された個人しか残っていない」、あるいは「社会は単純に前革命期の状態へとゆっくり戻りつつある」というステレオタイプ的なカンボジア社会の理解に対して、最近 30 年間の農村社会の変容を実証的に考察しようという両著者の姿勢に、評者は共感を覚える。だがパトロン＝クライアント関係という分析の枠組みとの関連で、たとえば仏教モラルといった権威の構成要素を現状に即した検討を欠くまま取り上げるなど、論旨展開に粗さが認められる。

第 6 章は、人類学者 Carol Mortland によるカンボジア系アメリカ人のディアスポラ的状况の考察である。彼女によると、本国がいまや比較的安全な場所となり、そこにクメール

の文化が存続しているという認識は、移民たちにとって非常に受け入れ難く、かわりに本国社会の潜在的な危険性と破壊され修復不可能なクメール文化という語りを神話のように繰り返している。その背景には、現在の決して楽とはいえない生活の中、移民という人生の選択への正当化が存在する。

アメリカへ渡ったカンボジア人難民を対象としては、従来、精神分析学のトラウマ研究などが主流を占めてきた。本論はそれらとは異なり、まさに最近 10 年間の本国と移民先の双方の状況の変化を射程にとらえた考察であり、興味深い。

第 7 章は、政治学者 Steve Heder が、民主カンブチア政権指導者を対象とした裁判のための国際法廷をめぐる国連と現カンボジア政府との交渉過程を分析する。当初、カンボジア政府が国連に促されて提出した裁判構想は、1979 年に実施した Pol Pot と Ieng Sary への欠席裁判と同様、フランス軍事裁判やヴェトナム人民法廷をモデルとしたものだった。しかし折りしも 1990 年代に、国際社会はジェノサイドとヒューマニティの侵害に対する国際法廷の設置を積極的に主張するようになり、政府はさまざまな修正の検討を余儀なくされた。

Heder は、修正案の提出や交渉過程をめぐる問題について、外国人専門家や国内知識人が打ち出す「何かカンボジア的であるもの」に結論を求めた分析を退け、顕在化したのは勝者の裁きと既存権力にとっての政治的便宜にもとづく刑罰の不問 (impunity) という 20 世紀に世界中で頻見された現象であり、必要

なのは内外の働きかけでそれを変えることであると結論する。詳細な政治過程の記述が中心で、論旨は説得的である。しかし正統的な政治学的関心に終始したためか、裁判問題とカンボジア社会との現実的な絡みが全く論じられていない点に物足りなさを感じる。

第8章は、イェール大学 Cambodian Genocide Program のディレクター Susan Cook が、ジェノサイドという大量殺人現象について、記録作成の意義を論じる。同プログラムは1994年に開始され、民主カンプチア政権下のカンボジアの実態を解明するために資料を収集整理し、関連目録・個人経歴・地理・写真映像資料のデータベースを作成してインターネットなどで公開している。¹⁾ 我々のヒューマニティの側面であるジェノサイドの発生を予防する目的に、カンボジアだけでなく、たとえば1994年のルワンダのケースを含めた多様な事例についての資料整理の推進が、将来は総合的な応用研究として洞察を展開することを期待したいとCookは述べる。

ジェノサイドに至る過程の普遍モデルを導き出すことができるのか、問題に関与した各国の外交戦略にまで研究の範囲を広げるべきか、ジェノサイド意識の政治的利用というイデオロギー的側面と研究との間に明確な一線を保持できるかなど、Cookは研究の将来に関する懸案も同時に提示する。本章はまさに今日的な意味で現代カンボジア社会に注がれる国際社会の関心を、前章とは別の視点から浮彫りにしており、それはまたグローバルな

国際社会へ向けた提言でもある。

「過去から立ち現れるカンボジア」という本書の表題には、ふたつの意味をみてとることができる。ひとつは内戦に始まった混乱と疲弊からの復興の途上にあるという社会の現状の意味であり、他方は長らくアクセスを欠いたまま議論の対象とされてきたカンボジア社会に、現地での調査活動にもとづく実証的な考察が加えられ始めたという研究環境の変化である。以上に紹介した8本の論考は最近10年間の新しいカンボジア研究の動向をさまざまな意味で示唆し、特に従来のカンボジア研究の閉塞的な状況を知る評者としてはそれぞれに興味深く読んだ。

しかし、論集全体としては物足りなさを感じたことも事実である。つまり幾つかの論考からは、著者の関心そのものが現地社会との接点を欠くという印象を受けた。それは、近年新しく得られた資料を用いたとしても、カンボジア社会に向けた理解の枠組みは旧態依然であり、同時代的な現状が十分に捉えられていないためともいえる。現地へ赴き、カンボジアの人々と語り合う機会がもてるようになったいま、かつて大戦中にアメリカでみられた国民性研究のような異文化研究を踏襲する必要は全くない。

編者は序論において、ポルポト派幹部を対象とした裁判設置に向けての法案が2001年1月にカンボジア国会で承認されたことに触れ、民主カンプチア政権について実態を検証し、現代カンボジア社会への影響を考察すべ

1) ホームページアドレスは、www.yale.edu/cgp

き時期がきた、と述べる。この裁判問題については本書第7章で Steve Heder が1990年代末から2000年初めまでの時期を中心に考察を展開しているが、その後紆余曲折を経て、現在もまだ設置の目処は立っていない。いうまでもなく、このクメールルージュ裁判設置問題の迷走の背景には、何よりも政権崩壊から20年という長い時間の経過がある。

評者にはここでクメールルージュ裁判の是非を論じる関心はない。しかしこの混乱をめぐる問題の構図からは、現代カンボジア社会と向かいあう研究者として留意すべきひとつの注意点を、比喩的に省察することができると思う。つまり、ある事象が問題として論じられるようになるまでには状況の変化を待たねばならなかったが、問題となるべき事象はそれ以前から存在していたという点である。当然、カンボジアには、我々外部者によって「過去から立ち現れる」と問題化される以前から、生きる人間の営みが存在していた。

本書に集められた各論はもちろん、再開されたカンボジア研究の最近10年間の到達点を把握するうえで、熟読に値する。評者としては中でも、第2章、第4章から第6章、そして第7章の各論からはそれぞれ刺激を受けた。長期的な停滞を脱したばかりのカンボジア社会研究には、まず多様な側面からの実証的な検討が求められる。しかしそれはあくまで第一のステップであり、先にはより広い時間的空間的な視野に立つ考察が待たれる。

引用文献

Chandler, David. 1999. *Voices from S-21: Terror and History in Pol Pot's Secret Prison*. Berkeley:

University of California Press (デーヴィッド・チャンドラー. 2002. 『ポル・ポト 死の監獄 S21』山田 寛訳. 白揚社).

Hinton, Alexander, ed. 2002. *Annihilating Difference: The Anthropology of Genocide*. Berkeley: University of California Press.

(小林 知, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Dorothy L. Hodgson. *Rethinking Pastoralism in Africa: Gender, Culture and the Myth of the Patriarchal Pastoralist*. Oxford: James Currey, 2000, 272p.

1970年代に「女性の人類学」の立場から人類学の男性中心主義が批判されてから約30年が経過したが、アフリカの牧畜社会を対象として女性の社会的役割を再評価する試みが始まったのは比較的近年のことである。この遅れは牧畜社会が民族誌上において男性中心的な社会の典型として描かれてきたことと無関係ではないだろう。たとえばポール・スペンサーはアフリカ牧畜社会の古典的研究において、ケニアのサンプル社会では女性は結婚の際に家畜と交換可能な「資源」であり、家畜と女性に関する権利を男性の年長者が管理することで若者に対して支配を及ぼす「長老制」こそが、社会の統合原理であると分析した [Spencer 1965]。いうまでもなく、そこには主体的な意思決定者として女性を捉える視点は欠落していた。

1980年代のなかばからは女性の活動に着